

## 藤丸宗造警部を悼む

児玉潤子

(会員 佐伯市中江町)

史談会誌第二三二号で史料紹介した今泉文書『明治十丁丑春薩州西郷吉之助隆盛蜂起』に「竹田より出戻り候巡查一人討死す」とされた巡查は藤丸宗造警部である。

大分市の古本屋で『藤丸警部小傳』に出会ったのを機に、西南戦争を振り返る中で、佐伯といささかの関わりを持った人として辿ってみた。

『小傳』は、『殉職警察官彰功録』、黒川建士編『殉義の人 藤丸警部』をベースに黒田勇のまとめたものを警察本部教養課長森瀬義康が抄録記述した。非売品であり部数が限られており、散逸したため、その後加筆されたものが『藤丸警部傳』である。

宗造は白杵市海添<sup>かいぞえ</sup>出身で旧姓安藤。下級藩士であった安藤喜助の次男として弘化二(1845)年に生まれ、二十一

歳で七石八斗の藩下士、藤丸良助(寡婦マキ)家を継ぎ、明治元年白杵藩士植木安楽の娘ヤスと結婚している。

明治四年の廃藩置県後、白杵大橋寺での豊後六藩知事の協議により、藩士の石高は十分の一ほどになった。下級藩士の生計の逼迫は予想されるところである。長兄安藤喜内は一足先に明治五年三月に白杵出張所附捕亡吏(巡查)になり、宗造は五月に捕亡吏となる。明治九年の福岡(現朝倉市)秋月の乱に出向き報償金二円を得て、十五等出仕に昇進した。その年佐伯署に配属され、十年一月十等警部となり、西郷蜂起による県境警備のため急遽重岡に分署が設置されその分署長となった。

当時の分署(二十人〜三十人)は健脚のものが選ばれ、戦闘要員というよりは偵察・報告が任務であったとされる。五月十二日午後五時頃薩軍重岡侵入。宗造は翌十三日午後四時頃、竹田に着き竹田署に急を告げ(直後薩軍が竹田侵入)、騎乗して十四日午後三時頃熊本に至り敵情報告し、鎮台に出頭、谷少将、児玉大佐に謁した。内偵を命じられて竹田へ引き返す。十六日は阿蘇郡馬見原島中弘二宅に止宿、以後阿蘇郡黒岩村副戸長森彦太郎宅に移動、森宅で十八日午前十時頃薩軍に捕えられた。翻意を迫られ

たが応じることなく義を貫き、明治十年五月二十三日午前八時頃、竹田市会々天嶽山西光寺前の稲葉川下木川原で斬首された。後、西光寺十九世中川純英師が薩軍と交渉の上、遺骸を引取り、供養した。一説では孤松上人とあるが、西光寺現住も不明であるという。

宗造処刑後、官軍が竹田に入ったのは薩軍が去った翌日二十九日であった。『竹田奇聞』によれば、宗造の斬首に名乗りを上げ二太刀下したが果たせなかつた博徒『鏡の文』こと河野文造を、妻ヤスの兄安藤喜生三(一等巡查)、有田護造、阿南喜盛両巡查が捕らえた。上角峠で有田が文造に一太刀あびせ、遺棄した。文造は、その後、父・妻に看取られ絶命したとされる。



縣護国神社藤丸宗造墓碑



東京警視隊供養塔

大分市大字牧の縣護国神社には、宗造の実兄喜内の発起で西南戦争終結二年後の明治十二年七月、宗造の墓碑が建てられた。横に東京警視隊供養塔百三基が並ぶ。一段高い奥の列左には旧会津藩家老佐川官兵衛(一大警部)の供養塔もある。



警視隊墓地入口に建つ毛利空桑撰書の藤丸宗造警部・土屋幸六郎佐伯普士熊・岩崎與作巡查の碑

昭和三十九年の宗造の命日に、臼杵市公民館長安藤幸男氏ほか有志が藤丸家の菩提寺ということで臼杵大橋寺に墓碑を建てている。

宗造の死後、五月二十六日長女サダ夭折、六月三十日に出生し父の名を受け継いだ男子は日露戦争で戦死(陸軍歩兵大尉正七位勲六等功五級)、父の隣に並ぶ。

五月二十三日、西光寺慰霊法要に参列した。

この日は思いがけないことが次々に起こった。

まず、この慰霊法要は宗造のためだけでなく、一事稲荷神社境内の就義碑の一段上にある碑に名が残る、やはり薩軍に処刑された安藤常弘のものでもあった。その末裔の方の話で、薩軍竹田放火の際犯人を捜していて捕られ処刑された小野氏の子孫の方も法要ではご一緒だという。小野さんが見えた時、臼杵大橋寺に宗造の縁の方が見えた話を見ると、「ここにも藤丸さんの妹さんの関係の方が見えたことがある。」とのこと。と、その時、そのI氏が現れた。

I氏は鹿児島県出身で現在は大分在住。いささか非現実的ではあるが、その筋の人から、祀っていない祖先がいると指摘された。この事から家系図を辿ると宗造の十二歳下の妹キク（I氏の曾祖母）まで来た。

また、鹿児島島の出身者としては薩軍側の子孫としても双方の供養、というこだわりもあるという。『藤丸警部傳』をお読みで、話が早かった。佐伯では慰霊法要という形は取っていないこと、県外からの戦死者の招魂所もさすがに現在は訪れる人もない様子であることを告げるとぜひ

行ってみたいとおっしゃる。



西光寺仏壇に並ぶ西南の役殉難者の位牌

慰霊法要が始まり、焼香もさせて頂ける段取りになった。席に着き、仏壇を仰ぐと、並ぶ位牌の中に、宗造斬首十日前に処刑された区長吉村鐵雄（哲雄）の名を見つけた。更に、右端に「佐伯普士熊（四等巡査・富士熊とも）」の名があった。思わず、I氏の袖を引っ張り、普士熊は宗造と共に重岡仮分署に勤務していた直入久住出身者であ

る旨を告げる。

流れ弾に当たり、重岡長昌寺下の川で遺骸が発見された普士熊は、大分縣護国神社には毛利儉(空桑)撰書の碑に名が残る。普士熊の父道鬼に吊(弔)祭料三十円、遺族扶助料百円が下賜されている。そのご子孫はご高齢となり、近年参加が滞りがちであるとのことであった。

西光寺本堂には深沢清画伯の宗造の最後を描いた油絵が掲げられていた。



宗造の最後を描いた油絵 (深沢清画伯)

宗造を調べるうえで、『小傳』に大分県警の会議室に飾られているとされていて、県警などに問い合わせたところ、野津原の警察学校にあるとのことと撮影に伺ったこともあったが、原物はここにあった。薩軍の服装がまちまちなのが臨場感あり。

就義碑は西光寺横の一事神社境内にある。



就義碑 (一事神社内) に参列する人々

この碑の発起人の一人に『佐伯 尾間捨蔵』の名がある。摩耗しているため文献で確認する。捨蔵は禁錮騒動を

助成した廉で、二年あまり小浜（現福井県）預けの刑に服した。明治初年の佐伯城下図には尾間家は一軒見える。また、明治五年の秋月橋門の書簡に尾間君平の名がみえるので縁者かもしれない。

西光寺前の稲葉川下木川原したぎ。ここで二人が処刑され、四肢切断、胆きもを取られる、という事実があった。



西光寺下、稲葉川下木川原　ここで  
区長吉村鐵雄、藤丸宗造警部が絶命した。

白杵では薩軍侵攻前より「薩軍は胆を取る。」と言う流言があった。史談会仲間に向うと四肢切断は試し切りの

可能性、『胆を取る』に関しては漢方における生き胆としての扱い説が出た。

薩摩には『ひえもん(内臓)とり』という風習があった。海音寺潮五郎には、重篤に陥った弟と妹が肝を飲まされていた記憶があるという。

里見弴には、伝聞を元に書かれた短編「ひえもんとり」があり、生々しい様子が書かれている。

現在の我々が思う、野蛮な、凄まじい、という印象ではなく、『胆の座った』、その『豪胆さ』にあやかるといふ、ある意味、リスペクト(尊敬・尊重する)の表れであると同時に薩摩の下級男子の豪胆さ、敏捷さを競ったとされる。

この探訪では佐伯、白杵、竹田のそれぞれの状況を思い知らされるものがあった。侍魂、大義、日和見と、さまざま視点で表現も変容するが、懐深く受けとめ、伝え継いだ人々の想いは続いていた。

生まれくる子に自分の名を付けるよう残した直筆の遺言、県南の状況を告げる報告書は心に迫るものがある。佐伯に赴きわずか一年足らず、任を果した彼、藤丸宗造をぜひ見直し、回顧していただきたい。



西光寺境内  
藤丸宗造像（朝倉文雄作）

【参考文献】

・『藤丸警部小傳』國家地方警察大分縣本部

警察隊長 青木誠

昭和二六年

・『殉職警察官彰功録』大分県警察部警務課編

昭和十八年

・『殉義の人 藤丸警部』黒川健士 雲山草堂

昭和十四年

・『藤丸警部傳』大分県警察本部 明治印刷

昭和四三年

複製（原版は黒田勇編 大分県警察本部昭和三十年）

・『臼杵史談』十六号、八八号

・『臼杵藩士録』九三三番 安藤喜内 高七石八斗 禄高の並びで推測

すると足軽、門番らと同格。臼杵史談 臨時増刊号 平成七年

・『綜合郷土誌 竹田 第貳號』水耀会 竹尾書店 昭和五六年

・『竹田奇聞・下』岡本香村 竹尾書店 昭和五一年

・『守り伝えたい竹田のひとつまみの歴史』荒木克彦

平成二七年

・『大分県史 近代篇Ⅰ』大分県総務部総務課

昭和五九年

・『大分県警察史 第1巻』大分県警察史編さん委員会

昭和三一年

・『乱世の英雄』海音寺潮五郎 文春文庫

平成二年

・『日本現代文學全集50 里見弴 長與善郎集』講談社

昭和五五年

【参 考】

法雲山大橋寺 臼杵市福良一一五。縁起によれば浄土宗西山禅林

寺派。南都東大寺子院西芳寺の僧祐徳が阿弥陀如来を奉載し西

国遍歴中、天文十七年臼杵に至り、臼杵七島の一つ産ヶ島に庵

を結び、大友宗麟の帰依を得た。産ヶ島から掛町に大橋をかけ

たことで「大橋寺」と呼ばれるようになり寺号となった。寛永

五年藩主 稲葉一道より森島（現在地）を賜る。

天嶽山西光寺 竹田市大字会々（かいかい）。浄土宗西山派。文禄三（1594）

年に播州三木から転封された岡藩初代藩主中川秀成が翌年三

木西 光寺（めみよ）の恵明を迎え建立。延宝七（1699）年現在地に。